



(仙 台)

- 1 所在地 宮城県仙台市川内
- 2 調査期間 一 第四次調査 一九八七年（昭62）七月～九月
二 第一二二次調査 一九九三年（平5）六月～
- 月
- 3 発掘機関 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4 調査担当者 一 梶原 洋・佐久間光平
二 藤沢 敦・関根達人・菊池佳子
三 藤沢 敦・関根達人・京野恵子
- 5 事施設跡 遺跡の種類 城跡・軍代
- 6 遺跡の年代 近世、近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 仙台城跡二の丸地区は、仙台市街地の西方、広瀬川の対岸、通称青葉山の東端

に位置している。本丸・三の丸とともに仙台城を構成する一部である。二の丸は、造営以後、主に仙台藩の政治・諸儀式の中心として機能するようになり、二代藩主以降は、その居館となつたところである。造営以前には、この場所に伊達政宗の四男伊達宗泰の屋敷が置かれていたと考えられている。また、政宗の長女五郎八姫の帰仙に際して、その居館である西屋敷が造営された場所でもある。

東北大学構内の施設整備に伴つて、これまでに一七カ次の調査が行なわれており、西屋敷や二の丸の建物の一部などが検出されている。

第四次調査地点は、二の丸北東部東側外郭線付近に相当する。木簡は江戸時代初頭の六a層から一点が出土した。

第一二次調査地点は、二の丸と北方の武家屋敷地区を区画していた堀の北岸付近に相当する場所である。木簡は三層、三a層、三a'層、三c層、三d層、四層、一号溝、三号溝などから計七三点が出土した。これらは、日清戦争前後から第一次大戦前後、一九世紀後半から二〇世紀初頭頃までのものである。

第一七次調査地点は、二の丸の中でも妻妾の居住域である「中奥」の、西端を区画する塀付近にあたる。木簡は七号土坑（一八世紀末葉～一九世紀初頭）から一点、一九号土坑（一八世紀末頃）から一点出土した。また、二九号土坑（一八世紀頃か？）からは木簡二点が出土した。

一 第四次調査

- (1) 「○□□李右衛門」
「○□□」

165×21×5 051

表裏に墨痕が認められるが、判読できたのはその一部分である。
形狀から荷札木簡と考えられる。

二 第一二二次調査

- (4) 「仙台輪重兵第一中隊
第四班内
伊藤武藏殿」
「北海道□□西中川郡
伊藤□□□出シ」

151×45×5 011

- (5) 「仙台輪重兵第□大隊
第壹中隊第
菅原泰助様。
行」

135×(59)×3 081

三層

三層上面

- (1) 「○仙台輪重兵第□兵
小□□□太郎様□」



152×52×9 011

- (6) 「仙台輪重兵第一大隊第□□」
「泉岡□□」

136×(15)×3 081

層位不明

- (2) 「○事務用」
「○第一中隊」

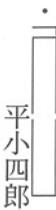
90×52×8 011

- (7) 「○伝騎用」
「○伝□□」

150×28×6 011

三a層

- (3) 「仙台河内輪重兵
第二大隊第一中隊ノ四」



145×(47)×9 081

52×29×6 011

平小四郎

」

52×29×6 011

- (9) •「○ワセリ」
•「○ワセリ」
57×29×6 011
- (10) •「仙台輪重兵第二大隊第一中隊」
•「仙台輪重兵第一大隊第一中隊」
福島県耶麻郡姥堂中隊
福島県耶麻郡姥堂中隊
大原新貞出
三a～三c層
】
- 189×(34)×6 081
- (11) •「○□□班」
•「○補助兵」
132×52×8 011
- (12) •「アキ
秋華□□」
89×55×11 011
- (13) •「仙台輪重兵第二大隊
○ 第二中隊四務班」
戸村房芳殿
○ 福島県石城郡内郷村
○ 宮炭鉱二号舍
戸村亀
】
- 三d層
】
- (14) •「仙台輪重兵第一大隊
○ 第一大隊三
○ 石川義治様行キ
○」
155×55×7 011
- (15) •「仙台輪重兵第二中隊
○ 五十嵐儀藏殿行キ
○ 五十嵐久米藏
○」
199×55×6 011
- (16) •「仙台輪重兵
○ 第二大隊第一中
○ 隊一班
○ 山科金蔵様行
○」
65×58×5 011
- (17) 「大正一□□」
43×30×3 011

四層

- ・「○予備微員佐藤七郎」
- ・「○□□□」

167×(27)×7 081

三号溝

- (19)
「○廿五年
製作中」

45×24×5 011

七号土坑

- ・「□国命」
- ・「□□命」

227×(30)×2 081

(1) □

内助助

- (21)
「□□□□
式拾六□□」

226×(62)×5 081

一九号土坑

- (22)
・「○歩兵第十七聯隊第二中隊
田中元太」

178×30×2 061
(45)×36×4 081

(2) 野□様

二九号土坑

- (23)
・「○歩兵第十七聯隊第二中隊
田中元太」

107×31×6 011

- (23)
・「○陸軍輜重兵一等卒八島今朝治」
・「○陸軍輜重一等卒菅野和三郎」

163×43×6 011

(3)
左孫太夫殿
衛門殿
伊甲□
殿

(84)×53×3 081

これらの木簡は陸軍第一師団の輜重隊が廃棄したものであると考
えられる。年代の明確な遺物などから、おおよそ日清戦争前後から

(4) □ □

(60)×(39)×1 081

第一次大戦前後の年代であると推定する。木簡は、兵士個人への荷
物の送付に使われた荷札木簡や、軍隊内での用品に付けられると考
えられるものが中心である。七三点のうち、比較的内容のわかるも
の一三点を掲載した。

II 第一七次調査

(1)は、曲物の側板に墨書が認められる。

(2)(3)は上下端が欠損しているため内容は不明であるが、いずれも人名が記載されていると考えられる。

(4)は、木目に沿って割れやすい非常に薄い板に記載されており、上下左右ともに欠損しているため、墨痕は確認できるが判読はできていない。

9 関係文献

東北大学埋蔵文化財調査委員会「東北大学埋蔵文化財年報四・五」(一九九二年)

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
『東北大学埋蔵文化財年報一二』(一九九九年)
同『東北大学埋蔵文化財年報一八』
(二〇〇四年刊行予定)

(柴田恵子)

